

## ASASHIO 朝潮

ウォーターラインシリーズNO.28

日本駆逐艦 あさしお (改装前)

JAPAN NAVY DESTROYER



イラストレーション・上田毅八郎

## WATER LINE SERIES

## 〈駆逐艦朝潮について〉

軍艦の名称は海軍創設のころには、フリーゲート、スループ、スクナー、コルベットなど外国名がそのまま用いられていましたが、明治6年には、軍艦と輸送船の2種類になりました。明治31年には軍艦は戦艦、巡洋艦、海防艦、砲艦、通報艦、水雷母艦と区別し、水雷艇と駆逐艇を別にしました。駆逐艇は明治26年英国で初めて建造され、これは後にデストロイヤーと呼ばれ、わが国では、駆逐艦と名付けられ、軍艦の種類に入りました。駆逐艦には基準排水量 1,000トン以上の一等駆逐艦と同じく 1,000トン未満の二等駆逐艦があります。日本海軍では明治30年に英国のヤーロー社とソニークラブ社に駆逐艦を発注しました。明治35年3月には、英国両社製の駆逐艦にならない、それぞれの長所を取り入れ春雨型を横須賀工廠で起工しました。その後、明治42年には 1,000トン級の海風、山風の2駆逐艦が建造されました。第1次世界大戦の勃発後、駆逐艦が必要となり、600トン

級の樺型二等駆逐艦が10隻建造されました。1次大戦終結後は 1,200トン以上の一等駆逐艦だけが建造されました。そして大正15年には特型駆逐艦と称する基準排水量 1,800トンの大型駆逐艦が出現しました。この特型駆逐艦は魚雷発射管61センチ9門、主砲12.7センチ6門、速力37ノットが要求されました。この型の特徴は次の点です。乾舷を大きくし艦の中央部にもフレヤー（舷側のそり）をつけ、艦橋は駆逐艦として始めて固定天蓋を設け、機関部の空気吸込口を水面上よりなるべく高く又、形状を改良しました。砲は砲塔類似の形状を採用し、後に発射管にも桶を設け、荒天時の戦力発揮が向上しました。マストを三脚式にし、艦橋下方に士官居住区を設けました。その後ロンドン条約以後、特型とほぼ同じ兵装を有するが排水量を減少した、初春型、さらに白露型が建造されました。白露型は兵装上ある程度軍部の要求を満たしましたが、速力、航続力、耐波性、渡波性にとぼしく高速發揮上に不利な点がありこのため、排水量 2,000トン程度でより高速を發揮しうる艦が要求されました。このようにして建造されたのが朝潮型で、これは第2次補充計画により建造された最後の特型駆逐艦で、昭和12年から14年にかけて10隻が完成、就役しました。朝潮をはじめと

する、朝潮、早潮、夏潮、黒潮の4隻は第15駆逐隊を編成しました。朝潮型の設計にあたっては復原性確保が重要な問題として考えられ、より高速を確保するため、新しく開発された52,000馬力のタービンを搭載し35ノットを得、航続力は18ノットで 7,600キロでした。兵装は12.7センチ連装砲3基とし前部1基、後部に背負式に2基配置し、魚雷発射管は61センチ4連装2基としました。艦橋も流線型のスマートな型となり、艦内電源には交流電源を使用しました。朝潮の艦内は次の通りです。1942年2月19日、バリ島海戦においてオランダ駆逐艦ビートハインに雷撃、および砲撃を加えて撃沈、1942年12月8日、ブナ東方海面において敵艦の至近弾を受け小破、ビスマルク海戦(1943年3月)においてオーストラリア機およびB-25の攻撃を受けて沈没しました。

同型艦は朝潮、大潮、満潮、荒潮、朝雲、山雲、夏雲、峰雲、霞、霰、の10隻です。

〈駆逐艦朝潮(改装前)主要々目〉  
基準排水量 2,000トン  
水線長 115メートル 最大巾10.3メートル  
速力 35ノット 馬力 50,000馬力  
主砲及び高角砲 12.7mm×6及び25mm×4  
魚雷発射管 61cm×8  
完成年月 昭和12年8月

## PAINTING

日本の軍艦の塗装は、艦体はいわゆる戦時塗色と言われる少し青みがかった濃い灰色を使っています。これは1903年(明治36年)末、日露戦争をひかえてこの塗装が採用されて以来、大戦終結までそのままでした。現在の海上自衛艦の船体色とはほぼ同じです。ただ大戦後期になって航空母艦に代わって薄緑色を使用しました。時には迷彩塗装も使われましたが、これはねずみ色の濃淡のぬり分

けでした。吃水線以下の艦底の色は、マルーンと呼ばれる暗い赤色です。甲板は駆逐艦、軽巡が鉄板張り、艦体と同色、重巡は艦によって鉄板張り、リノリウム張り、板張り種類が異なりますが、リノリウムと板張りは塗装されず、そのままでした。戦艦の甲板、ほとんどの空母の飛行甲板は板張りです。細部では煙突の頂部は黒、後部マストは、上方へは煙突の頂部と同じ高さから9m、下方へ

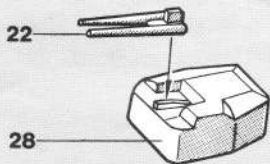
は煙突の黒色部分の下端までと同じ幅で黒く塗装していました。菊の御紋章は金色、砲身基部やカッターなどのキャンパスのカバーは白がよいでしょう。艦尾にひらがなの艦名が真ちゅう板で付いていましたが、戦時には艦体と同色に塗りつぶされました。書き出しは右からですので注意して下さい。開戦からしばらくの間、連合艦隊所属艦は識別のために前マスト、橋楼のトップは白でした。

〈作る前にお読みください〉

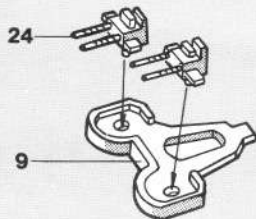
★ランナー（枝）から部品を切りはなす場合必ずニッパーかナイフ等を使って、ていねいに切りはなして下さい。★接着剤は組立てる部品の両方に少しづつ付けて接着して下さい。

## 1 主砲塔の組み立て

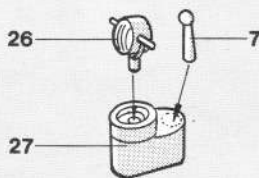
3組、組み立てます。



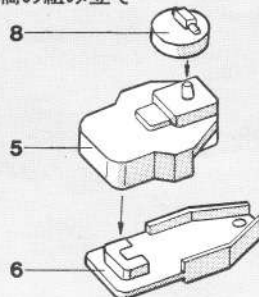
## 2 連装機銃の取り付け



## 3 探照灯台の組み立て

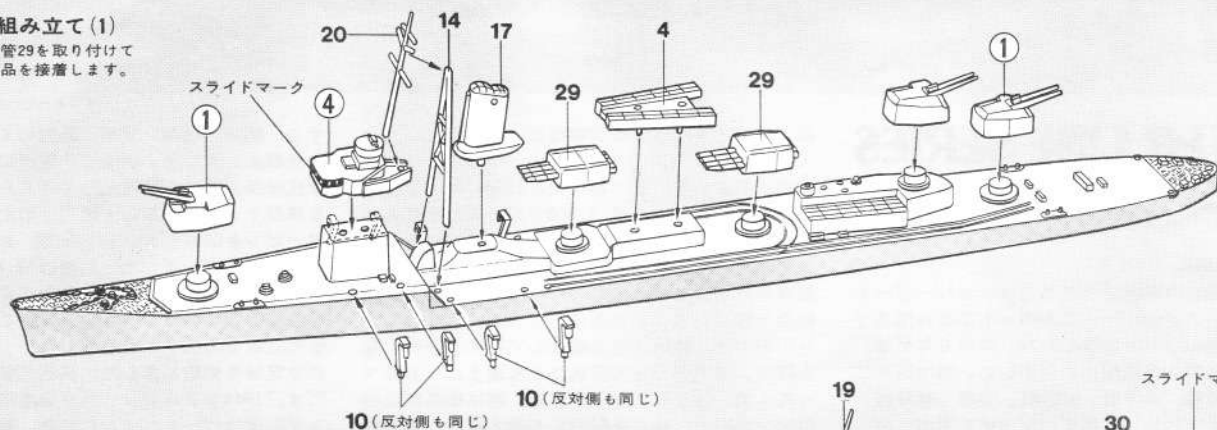


## 4 艦橋の組み立て



## 5 船体の組み立て(1)

魚雷発射管29を取り付けてから各部品を接着します。



## 6 船体の組み立て(2)

第2煙突デッキ②を取り付けてから第2煙突を接着します。

